

ドクター・オブ・
フィロソフィー 太田 朗君の「否定の意味——意味論序説——」

に対する授賞審査要旨

本書は英語学者である著者が英語を資料として言語の意味の問題、特に否定の意味について論じたもので、第一部「方法論」と第二部「否定の意味解釈」から成る。第一部において著者は、言語の意味に関する最近までの諸学説を採りあげ、その問題点を検討した上で自己の視点を定める。第二部においては、第一部で明らかにされた基本概念を用いて、英語の例文について否定の意味解釈を行い、理論の裏付けとしている。このようにして両部は相互補完的な役割を果たしている。

第一部では記号学の三部門である狭義の意味論 (semantics)、『語用論 (pragmatics)』、統語論 (syntax) のすべてにわたって意味の問題を考え、「文の意味」と「発話の意味」の両面から省察を進める。前者は統語構造による文の文法的意味であり、後者は文が実際に用いられる場合の文脈の意味である。前者は意味論の、後者は語用論の対象となる。著者はこれらの意味に関する多くの学説を詳しく検討した上で、変形生成文法のいわゆる「拡大標準理論」の枠組をもって自己の出発点とする。これは「標準理論」が文の意味は深層構造において決定され、変形によって表層構造が生成されるとき意味に変化は起らないとしたのに対し、表層構造からの情報も意味解釈に重要であるとする立場である。

著者は言語の意味を考える場合、そこに含まれている命題内容の分析に当っては、論理学が有力な基盤になることを認め、論理記号を用いて命題の意味の厳密な記述を試みている。一方において、論理形式や文の文法を超えたところに、言語の意味解釈の日常的な面のあることを重視する。言語の意味研究においては、命題の真理価値だけが問題ではなく、疑問・命令・願望・約束・脅迫などの発話行為が重要な問題となるから、発話行為における話者の意図を考慮に入れなければならない。さらに何が「話題」(topic)であり何が「評言」(comment)であるか、話者聴者にとって何が既知の情報として「前提」(presupposition)されているか、何が新情報として文の「焦点」(focus)になっているか、そのほか何が言外の意味として「含意」(implicature)されているかが問題になる。これらは論理学では扱えないことがらで語用論によって研究されるものとする。このような観点から、表層構造が意味解釈に関与する場合を扱う基本的な概念として「話題」「評言」「前提」「焦点」「含意」などを用いている。

第二部は、きわめて豊富な資料を英語に求め、否定に関する問題を網羅的に論じている。否定文を扱うには否定される肯定文がもとにあるので、まずその統語的・意味的記述を与え、そのあとで否定との関連を述べる。従って第二部では英文法上の主要な問題が広い範囲にわたって詳しく論じられている。肯定と否定とは真理価値を異にするとともに、語用論的にも大いに異なる点がある。語用論的に見た場合の否定は、相手の依頼・要求などを拒否する場合もあれば、相手の意見に対する不同意を示す場合も、不適切な表現を訂正する場合もある。否定辭が文全体にかかるのか、文中のどの構成素にかかるのか、否定の「作用域」(scope)の決定には統語論と意味研究の協力が必要である。

著者は統語的作用域内の否定の役割を論理的意味と語用論的意味の両方から説明する。論理的前提としては語自身に

内在する意味要素を、語用論的前提としては話者と聴者とが共有する背景的知識を問題としている。またある表現形式に慣習的に含まれる「言語慣習的含意」や、一々の具体的状況における話者の意図を表わす「会話の含意」をも考慮している。

このようにして否定に関する包括的な意味解釈が展開される。著者は理論とデータとをひとしく重んじ穩健な判断を下している。本書は言語の意味に関する理論的研究の現在における一つの到達点を示すとともに、諸学者によって論議された多くの実例に則して最先端の具体的問題を扱った労作である。言語の意味研究に対する大きな寄与として高く評価される。